

思春期の子どもたちである。両者は共に、性に関わる問題が前面的かつ直接的に押し出される時期にあたる。さらに、絵本やYA文学は、大人の読者も多く獲得しており読者層が広い。つまり、どちらにもジェンダーの視点を導入した議論や、作品づくりに結びつきやすい条件が整っていると見える。反対に、こうした状況にない幼年文学に潜むジェンダーの問題が、これまで見過ごされてきたように感じる。

しかし、幼年文学の読者層となる幼児期以降、思春期以前の子どもたちは、自らの性に要求される規範を、日々のさまざまな体験を通して着実に身につけている。そして、この時期の環境要因は、彼らのジェンダー観の柔軟性に大きな影響を与えるという。子どもたちが手に取る本も、その例外ではない。

幼年文学をめぐるのは、読者の年齢で文学をカテゴライズすることをナンセンスだと捉える向きもある。しかし、現実問題として、自立した読書が可能になったばかりの子どもに適した読み物は必要だ。そして、人生の最初期に出会う幼年文学は、子どもたちのジェンダー観の形成に、ひいては、未来の社会全体のジェンダーのあり方に無関係ではない。したがって、幼年文学におけるジェンダーの問題に、大人たちはもつと真剣に対峙する必要がある。

2 幼年文学における育児の描写

若桑みどりは、長い歴史の中で非対称なジェンダー構造が構築された過程について、次のように明言する。「女性は子どもを産むという身体の機能をもっているために、もっぱら子どもを産み、育児や家事をするものであると決められ、そのために家庭という「私的領域」に囲い込まれることになった。」そして、それは教育や文化、メディアを介して人々に「刷り込まれる」と述べる^{註3}。

実際に、第一子出産を機に離職する女性の割合は、現代でも約四七％に上る。男性については、当然ながらこのような調査自体が存在しない。依然として育児を女性の責務とする考えは支配的であり、「男性⇨賃金労働」「女性⇨家事・育児」という性別役割分業は、ジェンダー格差を再生産し続けている。

では、幼年文学のなかでの育児は、どのように描かれているのだろうか。特に本稿では、主人公の目から見た育児が描かれた作品——具体的には主人公にとっての妹や弟の誕生を扱った物語に注目する。それは読者の子どもたちに追体験をもちたらし、彼らの育児イメージを形づくると考えるからである。ただし、筆者はこれまで絵本をジェンダーの視点から読み解く研究に身を置いてきたが、幼年文学については門外漢であるため、客観的かつ信用性のある立場